TAMA 映画フォーラム会報　2007 年 9 月号

Cinema Bravo !

創刊第 2 号

Cinema　Bravo(シネマ･ブラボー)は TAMA 映画フォーラムのブラボーな会報です

今年度の映画祭上映作品のご紹介

第 17 回映画祭 TAMA CINEMA FORUM は今年は 11 月 17 日(土)から 25 日(日)の期間、多摩市内のやまばとホール、パルテノン多摩大小ホール、ベルブホール、ヴィータホールを会場に行われます。

さて、TAMA CINEMA FORUM では例年映画祭期間中に文化庁と東京国立近代美術館フィルムセンターによる優秀映画鑑賞推進事業を実施しております。

優秀映画鑑賞推進事業は、昭和 14 年から平成 6 年にかけて製作された日本映画の中から映画史を代表する作品や、好評を博した作品を選んで上映する事業です。

今年度は 1980 年代を代表する 4 作品を上映いたします。どの作品も見る価値のある作品です。やまばとホールの大きなスクリーンで鑑賞できるチャンスです。ぜひご覧ください(上映は 11/21、22 日を予定)。作品は以下の 4 作品です。

(作品紹介は東京国立近代美術館フィルムセンターのホームページ(http://www.momat.go.jp/FC/yusyueiga/H19/program-I.html)より引用)

転校生(大林宣彦監督、1982 年)

舞台は尾道の中学校。坂と海と光の街だ。夏のある日、ワンパク少年斉藤一夫のクラスに一人の転校生がやってきた。女の子だ。名前は斉藤一美といい、一夫と一字違いだった。一美は一夫と幼稚園の同級生だったといい近づいてくるが、そんなある日、ふとした弾みで寺の階段から落ちそうになった一美を救おうとして、一夫も一緒に転がり落ちる。気がつくとどうしたことか、一夫は一美に、一美は一夫になっていた。二人は入れ違ってしまったのだった。監督の大林宣彦は 8 ミリや 16 ミリの個人映画作家として、またテレビ CM の敏腕ディレクターとして知られていたが、1977 年の『HOUSE ハウス』で初めて長篇映画を手がけた。思春期の、少女のなかの少年、少年のなかの少女が重なりあう一瞬のゆらぎを、ファンタジー形式のなかで見事に映像化した作品である。この後に製作される『時をかける少女』(1983)、『さびしんぼう』(1985)とともに「尾道三部作」と呼ばれている。「キネマ旬報」ベストテン第 3 位。

遠雷(根岸吉太郎監督、1981年)

宇都宮でビニールハウスのトマト栽培を職業としている青年とその親友の、明暗分かれる青春を鮮烈に描いた立松和平の同名小説の映画化である。1970年代以降の日本は、この映画でビニールハウスの隣に団地が建つように、各地の都市近郊で風景が変貌し、旧来の「都市と農村」の対立だけでは描けない複雑な社会が形成された。またこの時期の日本映画界は産業としては低迷していたが、その中にあって日活撮影所は最も多くの映画を量産し、次々と新しい才能を送り出し続けた。この映画の監督根岸吉太郎と脚本家荒井晴彦はともに日活を経由しており、そうした現代的な風景、またその中で育った多様な価値観で揺れる青年像を描くことで、この作品をリアルな生活感覚あふれる新世代の青春映画に結実させた。主人公の青年はトントン拍子に結婚式を挙げ、その親友は不幸な殺人を犯してしまう。長々と続く幸せな披露宴の最中に親友が罪を告白するという印象的なシーンは原作にはなく、脚本における創作であった。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

花いちもんめ。(伊藤俊也監督、1985年)

今日大きな社会的関心を集めている、老人性の認知症(痴呆症)の問題に正面から取り組んだ伊藤俊也監督の力作。アルツハイマーとなっていく一人の考古学者と、その家族たちの苦闘する姿が、とくに舅と嫁の関係を軸に力強い演出でリアルに描きだされている。病人の介護をめぐり、いわゆる「家族愛＝親子愛」の根源を問いただしていく、この映画の主題はますます重いものになっている。「女囚さそり」シリーズ(1972〜73)や『誘拐報道』(1982)など、常に社会的な広がりを視野に入れたドラマ作りを特徴とする、伊藤監督らしい重厚なホーム･ドラマである。主人公の老学者を演じた千秋実は、自分自身が脳卒中から回復した体験をもっており、その存在感は圧倒的であった。この年多くの演技賞を受賞している。

夢千代日記(浦山桐郎監督、1985年)

舞台となるのは山陰の湯村温泉。被爆二世である夢千代は、白血病と戦いながら母が残した芸者置屋「はる屋」の経営を続けていた。そこには、さまざまな事情を抱えた女が、男がやってくる。限られた命のなかでひたむきに生きる夢千代は、ふと知り合った旅役者に心をひかれていく…。夢千代の生みの親でもある脚本家、早坂暁によれば、この夢千代は当初から吉永小百合を想定して作られたキャラクターであり、今日では彼女の当たり役となっている。1981年から84年にかけてNHKで3度にわたって放映された人気テレビ･シリーズの映画による完結篇。吉永小百合と監督の浦山桐郎コンビの復活が話題を呼んだ。世評の高い、浦山のデビュー作『キューポラのある街』(1962)は、主演の吉永を「少女スター」から「女優」に脱皮させた作品としても知られている。浦山は本作完成後に死去し、これが遺作となった。生涯に9本しか作品を残さなかった浦山は、寡作監督として映画史に名前を止めることになったが、うち吉永の出演作は4本を数えている。

オススメ映画のコーナー

ここでは TAMA 映画フォーラムスタッフのブラボーなオススメ映画を新旧問わずに紹介します。今回は TCF 新人の 2 名が岩井俊二監督作品を取り上げています。

『オーシャンズ 13』 (スティーヴン･ソダーバーグ監督)

シナトラファミリーの娯楽作、『オーシャンと１１人の仲間たち』のリメイクも早くも3作目。贅沢なメンツもそのままに今回はアルパチーノとエレンバーキン(シーオブラブ･コンビ！)をゲストに仲間の顔をつぶされたリベンジに出るストーリー。ちょっと肩透かしな前作の鬱憤をはらすべく、今回は明快かつテンポ良い。

仕上がりでラスベガスロケのとにかくゴージャスな気分を堪能出来る。Gクルーニーとアルパチーノの新旧いい男のやりとりが見物かと。全体の7割を占める音楽も完璧で文句なしの快作(舟)。

『河童のクゥと夏休み』 (原恵一監督)

子供時代、夏休みの終り頃、宿題を一気に片付けようとして片付かないそんな少年時代を思い出したく原恵一監督の「河童のクゥと夏休み」を劇場にて鑑賞した。足を運んだ劇場では、公開して1月近く経つのに、8,9割ほど席が埋まっていて前評判の良さを伺わせる。

早速、感想。作品全体を通じて、悪い点が見当たらない素晴らしい作品。話のテンポもよく、実際に河童が現われたら？というシチューエーションを余すとこなく表現できていると思う。アニメ作品として、子供はもちろん大人も、いや、むしろ大人が楽しむべき作品だと思った。以下に自分が気に入った点を挙げる。

1. 素晴らしい人物(河童のクゥを含む)描写と演出

誰もが小中学校でみたような光景を思い出す、いじめっ子の嫌らしさ、仲間外れが生じる瞬間、物をねだるときの生意気さ、素直な喜び等々、あげればきりがないぐらい自分は共感してしまった。特に人間の持つ善良さ、いい加減さ、邪悪さも痛いぐらい感じてしまい、話に引き込まれてしまった。この巧みな人物描写は、クレヨンしんちゃんシリーズのアニメ化に長く関わった監督のなせる業なのかもしれないなぁと思った。

2. 背景に息をのむ

背景画が本当に良い。東久留米市の住宅地から、都区内のビル群、自然溢れる世界まで、どの場面の背景も美しかった。特にラストシーンに登場する背景には心が晴れた。初期のジブリ映画作品以来の感動を憶えた。印象的だったのは、水そのものが全編ＣＧで描かれていたこと。河童に対する水。その存在は、彼らにとっての生命そのもの。特別であることを浮きたたせているのではと勝手に深読み。自分はこの演出に対して好意的に捉えたが、正直、若干の違和感(背景画との親和性について)もあるので、やや好みが分かれるのではないかなぁと思う。

3. テンポの良さ

2 時間 18 分という長尺にも関わらず、飽きずに見ることができた。正直、途中でいつ終わるのかなぁと思ったところはあったが、その度、その度に次の展開が挿入され、いつの間にかラストシーンへ連れてこられた。楽しさ、発見、哀しさ、嬉しさを内包する脚本の秀逸さに大満足。

4. 河童観

キュウリ好き、皿が乾くのを嫌う、相撲好き、泳ぎのうまさ等、民間伝承の河童のステレオタイプを描いているにも関わらず、まるで河童をまるで、見てきたかのように瑞々しく描いていると思う。そして、見た後に、河童(というよりクゥ)を好きになるだろう。

とベタに褒めまくったが、悪い点(地味めな宣伝…、テンポは良いが尺が長いのは事実)や好み(クゥの爬虫類っぽさとか…)に依存する点が全く無いわけではないだろう。でも、誰かに「面白い映画ない？」と聞かれたら、自分は今のハリウッド映画を差しおいて間違いなく本作をお勧めする。完成度では「鉄コン筋クリート」を上回ると評価した(田)。

『If もしも～打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？」 (岩井俊二監督)

93 年に TV ドラマとして放映された作品ですが、夏になると見たくなるという人も多いのではないでしょうか。

花火大会の日。両親の離婚で傷付いた小学生のなずなは典道と祐介、競泳で勝った方と駆け落ちしようと企てます。勝った祐介を花火大会に誘うのですが、祐介は男友達の方を選んでしまう。その後母親に連れ去られるなずなを見た典道は「あの時俺が勝ってれば…」と後悔し、物語は典道が競泳に勝っていた場合のストーリーになっていく…という、タイトル通り少し複雑な話になっています。

花火大会や小学校のプール、友情、恋愛、転校…など懐かしい要素がいっぱいのこの映画はごく普通の夏の日に起きた、小学生の小さな人生の分岐点を描いています。

実はこの作品は元々は今とは違う物語だったようのですが、紆余曲折を経て今の形になったようです。

撮影から七年後に主演の二人がロケ地を訪れる「少年たちは花火を横から見たかった」を一緒に見るとより一層楽しめます。

是非ご覧になって下さい(新)。

『スワロウテイル』 (岩井俊二監督)

“円”が世界で一番強かったころ、夢を求め日本に渡ってきた、“円盗(イェンタウン)”と呼ばれ蔑まれる移民たちが主人公。同じく“円都(イェンタウン)”と呼ばれる架空の都市を舞台に、彼らの成功と挫折を描いた作品「スワロウテイル」。私が初めてこの映画を観たのは DVD 化されて何年も経った後だった。そのころ既に出演者や監督の名前は有名で、きっかけも CHARA の芝居に興味を持っただけだったと思う。観始めてすぐ、セリフに字幕が出ていることに違和感がなくなり、あっという間に世界に引き込まれたのを覚えている。

“円都”は確かに架空の街で、でもいつの間にかそれが本当にあった事のような、未来に起こる事のような気がしてくる。何度も観た本作だけど、私はこの物語の感想を未だにうまく言葉にできない。友達にもうまく薦められない。ただ毎回観終わって、字幕と小林武史の音楽が流れ出したとき、それまで自分が感じたことのない感情が押し寄せてくる。そして、それまで観たシーンが頭の中を駆け巡って、そこから抜け出せなくなる。ずっと彼らと“円都”にいたみたいに、離れがたくなる。やっぱりうまく説明できないけど、一人でじっくり観てもらいたい作品です(臼)。

『童貞。をプロデュース』(松江哲明監督)

本作は、名前のとおり二人の童貞を松江哲明監督がプロデュースしたドキュメンタリー作品である。「俺は、君のためにこそ死ににいく」と「ビューティフル･ドリーマー」の二部構成となっており、前者では純愛を信じ、AV を蔑みつつも、好きな女の子に告白もできずウダウダする童貞を、後者では、恋愛を現実のものとできないならばと、引退した 80 年代のアイドルにはまり、彼女に捧げる映画まで作った童貞をプロデュースしている。

文字にしてしまうとどうしようもないが、このようなセンセーショナルに扱われがちな話題において、両パートとも大半の部分をプロデュース対象が自ら日常生活を記録しているため、童貞･オタクのライフスタイルや考えを地に足のついた、浮ついていない状態で垣間見ることができ、新鮮だ。またそれを遠隔演出する松江監督の手腕も冴えている。

本作は、真面目で堅苦しく、大きなテーマを扱うと考えられがちなドキュメンタリーを、愉快で面白く、身近なテーマを扱うドキュメンタリーもあるんだと気づかせてくれる作品であるので、ぜひ多くの人に観てもらいたい(領)。

(オススメ映画の続きです．．．)

『幕末太陽傳』 (川島雄三監督)

落語『居残り佐平次』から題材を取った川島雄三監督の時代劇。喜劇の体裁を取ってはいるがフランキー堺扮する、居残り佐平次の時折見せる陰影が奥行きを与え、人生は哀しいだけでもないし、可笑しいだけでもない――、そんな人生の一断面を見事に切り取ってみせた傑作へと押し上げている。

又、立体的な画面の構成や、ショットによって見せる正しく映画的な「笑い」は最近のテレビドラマ・コント化した邦画には久しく見られないものだ。

惜しむらくは川島監督が当初意図していたラストと異なってしまい映画の構造がちぐはぐになってしまった事か。

ともあれ昨今の幼稚な「作家性」とも薄っぺらな「感動」とも無縁な川島監督の粋を見るべし(松)。

TAMA 映画フォーラムからのお知らせコーナー

今年の映画祭は 11 月 17 日(土)から 25 日(日)までの開催予定です！

今回ご紹介した作品を始め、上映作品を選定中です。次号では上映作品をご紹介できるかと思います。
また、第 8 回を迎える TAMA NEW WAVE も計 83 作品の応募が集まり、現在一次審査中です。
こちらもご期待下さい。

たまシネマ隊に参加してみませんか

「一年間を通じて参加するのは難しいけど、映画祭の期間だけでも参加してみたい」
そんな方はぜひ「たまシネマ隊」に参加してみて下さい。
今年度のシネマ隊の説明会は 9 月 30 日(日)と 10 月 14 日(日)に行います。
ご興味ある方はホームページよりお申し込み頂くか、事務局へお問い合わせください。

支援会員制度のお願い

「実行委員やシネマ隊として参加するのは難しいけど、
TAMA 映画フォーラムを応援したい」
そんな方はぜひ「支援会員」としてとしての応援をお願い致します。
支援金寄付　個人会員：一口１０００円　法人（団体）会員：一口５０００円
ご協力いただいた方は、インターネットのホームページなどでお名前を掲示します。
ただし掲示を希望されない方は、その旨を郵便振替用紙通信などでお知らせ下さい。

●郵便振替番号　００１６０－５－５４１１２３
加入者名　TAMA 映画フォーラム実行委員会
(ご不明な点はお問い合わせ下さい)

編集後記
夏休みも終わり、映画祭的には一番忙しい 3 ヶ月間(9、10、11 月)となります。
次号では上映作品を全て紹介できるかと思います。
ご期待下さい。

編集スタッフ:吉野治、尾島可奈子、尾口領、松田光平、舟口聡
ライター:田口昇、臼田紀美子、新倉明由美

発行：TAMA 映画フォーラム実行委員会
〒２０６－００２５東京都多摩市永山 1-5（ベルブ永山）多摩市立永山公民館内
TAMA 映画フォーラム実行委員会
TEL080-5450-7204（直通）、 042-337-6661 、FAX 042-337-6003
http://www.tamaeiga.org/　mailto:info@tamaeiga.org

TAMA CINEMA FORUM